

堀尾氏の出雲支配における支城について(3)

－亀嵩城と三沢城－

中井 均

はじめに

慶長5年（1600）の堀尾吉晴、氏忠父子出雲入国に際して居城としたのが富田城であった。そして、領国支配と国境警備のために三刀屋城、赤名瀬戸山城が支城として改修されたことはすでに述べた通りである⁽¹⁾。また、慶長12年（1607）に松江築城が開始された後は、富田城も支城となり堀尾河内が入れ置かれた。

ところで、堀尾氏の出雲支配における支城は、この三刀屋城、赤名瀬戸山城、富田城だけであったのだろうか。例えば、宝永2年（1705）の覚融寺（奥出雲町）の文書に、「一、堀尾山城様御代前田丹波殿、堀尾但馬殿亀嵩之城一覽之上ニテ丹後（備後）力、伯耆之境目自然諸國動乱之節御番衆為被入置為御用意當寺御建立被成竹林三九郎共申仁ニ普請奉行被仰付候之由、」と記されており、堀尾忠晴の代に前田丹波（堀尾泰晴の姉の孫）、堀尾但馬（堀尾泰晴の弟方泰の子）を備後、伯耆の境目として亀嵩城に配置していたことが記されている。

さらに、寛永10年（1633）に作成された出雲国絵図（東京大学総合図書館蔵南葵文庫）には、「居城」として末次城（松江城）が記されているほか、富田、三刀屋、赤穴（赤名）、亀嵩の4ヶ所に「古城」と記されている。西尾克己、稻田信、福井将介氏によると、この「古城」表記は堀尾氏の出雲支配における支城であった城跡を記しているものではないかと考えられている⁽²⁾。

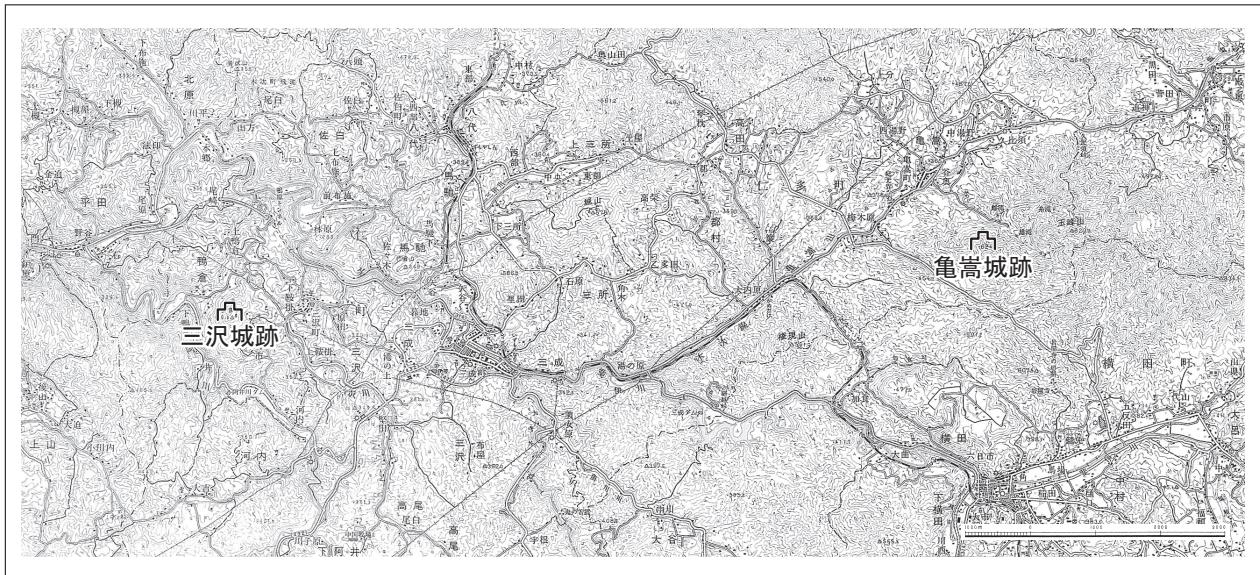


図1 亀嵩城跡と三沢城跡位置図

こうした史料から、富田城、三刀屋城、赤名瀬戸山城とともに亀嵩城も支城のひとつであった可能性が高い。一方、島根県教育委員会の実施した県内の中世城館跡分布調査によって、三沢城に石垣の用いられていることが報告されており⁽³⁾、堀尾氏入国以後に改修された可能性がある。そこで、拙稿ではこの亀嵩城と三沢城について検討をおこないたい。

亀嵩城の歴史と構造

さて、現在知られている亀嵩城とは、仁多郡奥出雲町亀嵩に所在する標高624mの急峻な山頂に位置している。築城については文明年間(1469～1487)頃に三沢氏によって築かれたと伝えられ、天正2年(1574)には三沢為清が禅隆寺を移築するため陣僧役を免除している。

天正13年(1585)には為清の子、三沢為虎は毛利輝元に起請文を差出し、忠誠を誓っている。この起請文には、「一、自然御弓矢出来之時、亀嵩及籠城程之儀候者、御一人被差出、一丸預申、萬事可遂相談候、乍恐、吉田之御端丸と被思召、被付御心候而可被下事」(『毛利家文書』)と記されており、亀嵩城を吉田郡山城の端丸と考えてほしいと述べている。

天正17年(1589)に三沢為虎が毛利氏によって安芸に移されると、同19年(1591)には毛利氏の命により冷泉元満が仁多郡で3,058石を宛行われ亀嵩城に入れ置かれた。慶長の役に毛利輝元に従って朝鮮に出陣していた元満が慶長2年(1597)に蔚山で戦死すると、翌3年には子の惣四郎元珍に元満の遺跡が安堵されている。以後、慶長5年(1600)まで元珍が亀嵩城に居城していたようである。

城跡は南北約250m、東西約150mを測る中規模の山城である。その構造は曲輪の中心部に一段高く天守台を思わせるような櫓台を構えた主郭を配し、南北に延びる尾根筋に一直線上に曲輪が構えられている。主郭の西北方向に延びる尾根筋にも2段の曲輪が配されている。これらの曲輪は尾根を削平しただけのもので、石垣はもちろん土塁も一切設けられていない。さらに尾根筋を切断する堀切も認められない。ただ、主郭の東に延びる尾根筋にのみ、主郭直下を堀切っている。こうした構造からは亀嵩城が戦国時代後半の発達した城郭ではないことが読み取れる。

三刀屋城、赤名瀬戸山城、富田城の支城に共通する特徴は、石垣によって築かれた城であるという点である。慶長5年(1600)頃の築城はこれら3城に限らず、全国的に石垣による築城が主流を占めている。支城も同様で、筑前の黒田氏領六端城や、安芸・備後の福島正則の支城群も石垣によって築かれている。

こうした構造より、現在知られる亀嵩城は三刀屋城、赤名瀬戸山城、富田城と同じ構造の支城とは評価できない。



亀 嵩 城

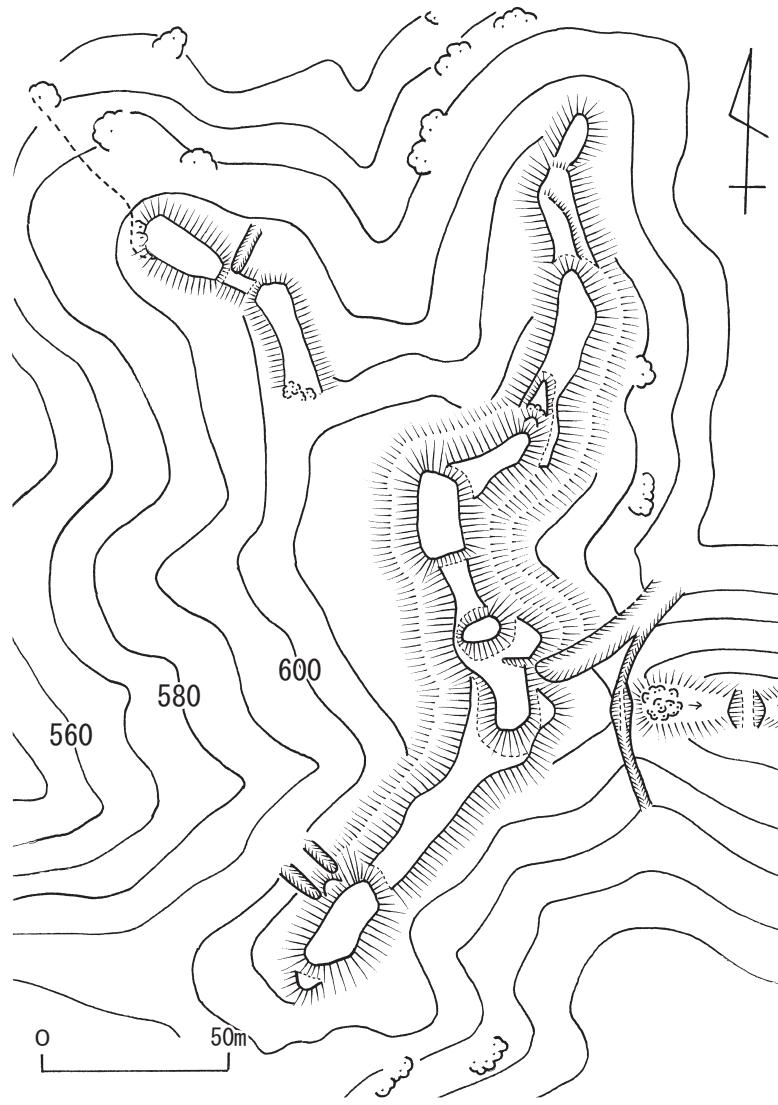


図2 龜嵩城跡概要図（中井均作成）

三沢城の歴史と構造

それでは亀嵩城に替わる支城の可能性がある城跡は存在するのであろうか。慶長5年（1600）以降の築城であれば、確実に石垣を伴う城である。そこで出雲において石垣の存在する城跡は三刀屋城、赤名瀬戸山城、富田城を除くと、三沢城にのみ認められることが判明した。

三沢城は、要害山城とも呼ばれる山城で、仁多郡奥出雲町三沢に所在する、標高418.5mの通称要害山の山頂部に位置している。

城主の三沢氏は承久の変で戦功のあった信濃の飯島弘忠が出雲三沢郷の地頭職を得て、その孫為長が乾元元年（1302）に当地へ下向し、当時鴨倉山と呼ばれていた要害山に城を構え、三沢氏を称したと伝えられている。

三沢氏は明徳の乱によって守護山名氏の勢力が一掃されると、応永32年（1425）頃より隣接する横田庄にも進出し、鉄の生産と流通を掌握して出雲最大の国人となる。その後、永正6年（1509）に藤ヶ瀬城に居城を移すが、三沢城は支城として存続している。天正17年（1589）に三沢為虎が安芸に移されると、三沢城も廃城になったと考えられる。

城跡は南北約360m、東西約300mを測る巨大な山城である。その構造は山頂部にほぼ同じ高さで主郭と、巨大な堀切を挟んで北側には副郭が備えられている。主郭は通称本丸と呼ばれ、副郭は鳥居ヶ丸と呼ばれている。主郭の西側一段下には岩棚郭と呼ばれる曲輪が構えられ、その南辺には長大な土塁が廻り、主郭直下には土塁を開口させ虎口が設けられている。

主郭の南東に派生する尾根筋は4段にわたって削平され、曾根ノ郭と呼ばれている。副郭とこの曾根ノ郭に挟まれた谷筋が大手口と見られ、山腹には巨大な曲輪が配され、榊形状の虎口が構えられている。

副郭の北側には巨大な堀切が構えられ、その外側の尾根筋にも曲輪が階段状に設けられている。さらに副郭の東北に延びる尾根筋の先端には十兵衛成と呼ばれる一郭が構えられている。副郭から伸びる尾根を掘り切り、土塁を巡らせた十兵衛成は、その先端部に堀切を設け、周囲には横堀を巡らせており、独立した出城の様相を呈している。

曾根ノ郭の先端に位置する神ノ木垣も山腹に構えられた曲輪で、長大な土塁線と堅堀によって南東尾根筋を防御している。

この三沢城の最大の特徴は大手曲輪の正面を石垣によって築いていることである。ここは大手門と呼ばれ、榊形状の虎口であったよう、その正面には人身大の巨石を用いた高石垣が築かれている。この虎口から主郭に至る登城道はつづら折れとなっているが、その側面も石垣によって築かれている。

なお、城跡山腹には御納戸垣内、座頭屋敷、成田屋敷、四日市などの通称地名が残されており、城下の存在したことを示唆している。



三沢城大手石垣

横田方面への支城は存在しなかったか

さて、寛永10年の出雲国絵図に記された「古城」標記が、堀尾氏時代の支城を示すものであれば、亀嵩城跡が支城となるが、みてきたように亀嵩城の構造は戦国時代の山城であり、慶長5年以降の城に認められる斉一性が認められない。



三沢城登城路の石垣

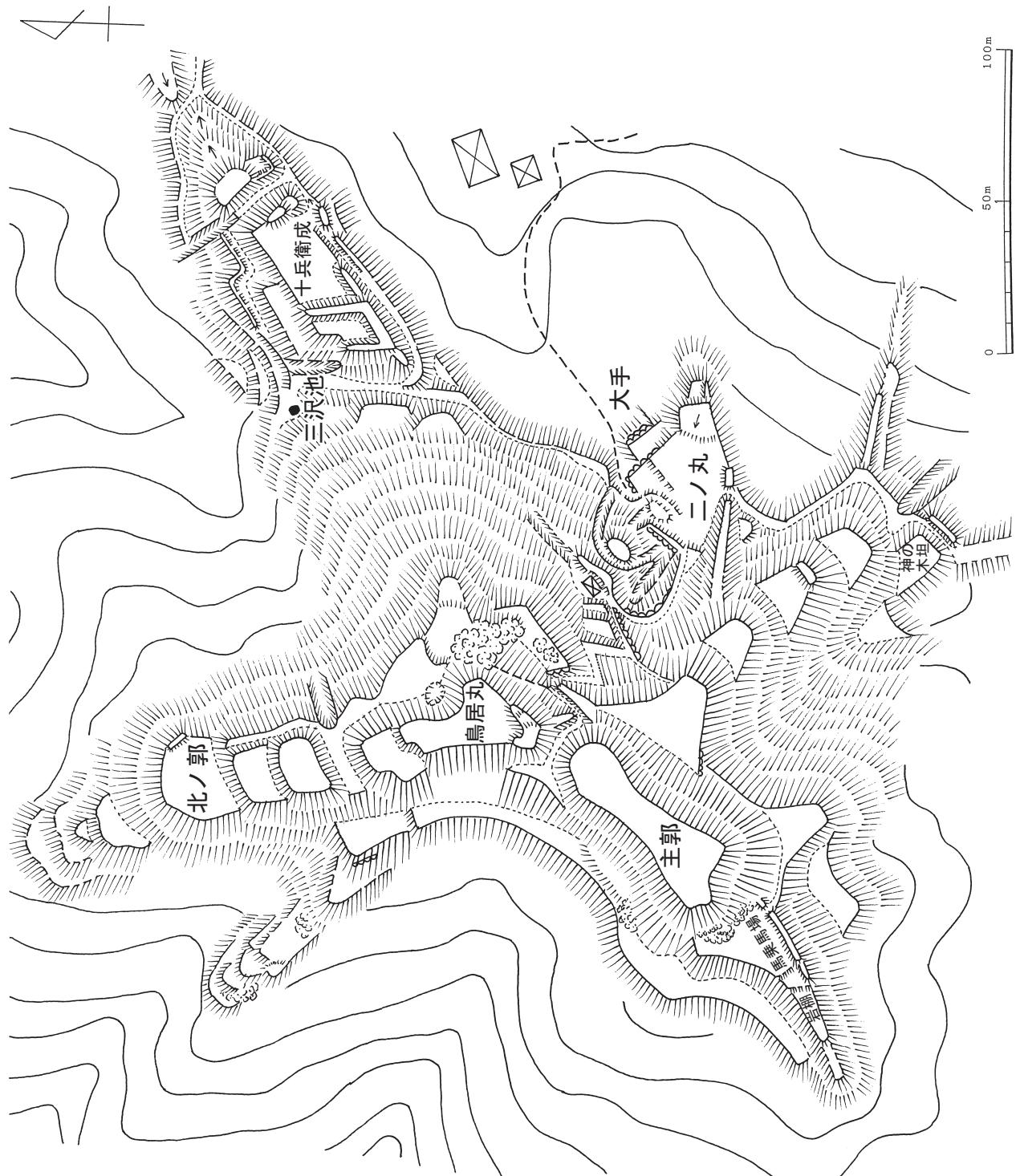


図3 三沢城概要図（中井均作図）

一方、三沢城では大手虎口には出雲では慶長以降に築かれた堀尾氏の本・支城にしか導入されていない石垣が認められる。ところが、石垣はこの大手部分と登城道にしか認められず、山上の曲輪群には一切設けられていない。三刀屋城、赤名瀬戸山城では、山上の曲輪群を石垣によって築いているのとはまったく逆であり、この大手石垣をもって支城とは断定できない。さらにその石垣の構造も三刀屋城、赤名瀬戸山城とは大きく異なっている。三刀屋城の石垣石材には矢穴が認められることより、矢穴技法によって切り出された石材を用いていることが判明している。赤名瀬戸山城の石垣石材にはほとんど矢穴は認められないものの、築石にはほぼ同じ大きさの粗割石材を用い、出隅部は長方形の石材を交互に積み上げる算木積となっている。

ところが三沢城大手石垣は、自然石を積む野面積で、出隅部には巨石を用いるものの、算木積とはならない。その構造は一見して三刀屋城や赤名瀬戸山城の石垣に比べ、古式な様相を呈している。

しかし、三沢城以外に奥出雲周辺で石垣を用いた城はなく、この古式の様相は年代差を示すものではなく、工人差を示すものとみてよいだろう。ここではその構築を堀尾氏の入国とみておきたい。

なお、西尾氏らによる絵図調査では、寛永10年の出雲国絵図のうち東京大学総合図書館蔵図では、三沢、白鹿と想われる場所に山城らしい描写の存在を指摘されており、三刀屋などの4城とは別に存続していた可能性が考えられる。

ところで、亀嵩城に関する史料である、「仁多郡中湯野村雲龍山覚融寺書出帳写」を今一度分析すると、「亀嵩之城一覽之上ニテ丹後（備後）伯耆之境目自然諸國動亂之節御番衆為被入置為御用意當寺御建立」とあり、備後・伯耆国境に位置する亀嵩城に番衆を入れ置くために覚融寺が建立されたのである。つまり亀嵩城を根底から増改築したのではなく、山麓に寺院を建立して、亀嵩城は詰城として利用する目論見であったと解釈できる。

こうした亀嵩城は、支城としては三刀屋城や赤名瀬戸山城、富田城とは違った利用であった。備後、伯耆の境目として、国境警備はおこなうものの、領域支配としての支城ではなく、戦国期の山城を改修しなかったものと考えられる。

では、三沢城の大手石垣はどう理解すればよいのであろうか。石垣はもちろんのこと、十兵衛平の構造も戦国時代の三沢氏時代に築かれたものではないようである。この三沢城も山城部分に改修は認められず、山麓部にのみを改修したものである。おそらくこちらも亀嵩城とともに国境警備の城として改修されたものと考えられる。備後からの街道は王貫峠を越えて、三成を通って松江に至る。その三成で街道を挟んで両側に国境警備として堀尾氏によって支城となったのが、亀嵩城と三沢城であったのではないだろうか。つまり、2城が対となって機能していたわけである。山頂部の山城は改修せず、山麓部に寺院を建立して、番兵の駐屯地にしたり、あるいは山腹の大手曲輪に石垣を構え、山腹を改修して支城としたのであろう。このため幕府への提出絵図には、亀嵩城を支城として描き、三沢は山城らしき描写としたのではないだろうか。

なお、西尾氏らによる古絵図の分析によれば、寛永15年（1638）の出雲国絵図では、古城の標記が富田、赤穴、亀嵩、三沢、白鹿、真山、和久羅山、桧ヶ仙、平田、鳶ヶ巣、藤ヶ瀬の11ヶ所に増えているという。これは天草のキリストン一揆後に幕府がより古城に敏感となった表れと指摘している。この絵図作成では亀嵩城と三沢城の両城跡が記載されている。より厳しい幕府の古城政策に、堀尾氏は亀嵩と三沢両城跡を記したのではないだろうか。

おわりに

横田地域は備後、伯耆の国境であり、慶長5年（1600）に出雲に入国した堀尾吉晴父子にとっては、福島正則領（備後）、中村一忠領（伯耆）と接しており、支城を築く必要のあったことは明らかである。その役割を担ったのが戦国時代に城の構えられていた亀嵩城と三沢城であった。両城の構造は支城として改修された三刀屋城、赤名瀬戸山城、富田城の構造と大きく異なるものであった。それは領域支配をも担った3城と、国境警備のためにのみ設けられた亀嵩、三沢両城との差ではなかつたかと考えられる。

そして、幕府に提出した絵図には同等に古城と記したのであろう。そこには2城を支城として古城としたのではなく、1城でもって報告したのであろう。そして三沢は城跡らしい描写で済ませたのである。しかし、島原の乱後の古城に関する幕府の過剰な把握に対して、三沢城も古城として記載されたのである。

このように亀嵩城と三沢城を分析することによって、支配の核となる支城と、国境警備の支城に構造の差の存在したことを明らかにできたのではないだろうか。

最後になりましたが、三沢城跡の踏査に同行していただいた山根正明先生、亀嵩城跡の踏査に同行していただいた西尾克己先生、松江市史料編纂室の稻田信室長、福井将介氏に厚くお礼を申し上げて拙稿を終わりたい。

なお、富田城と隠岐に関しては次回に報告したい。

注

- (1) 中井均 2012「堀尾氏の出雲支配における支城について(1)－三刀屋尾崎城－」『松江城研究』1 松江市、中井均2013「堀尾氏の出雲支配における支城について(2)－赤名瀬戸山城－」『松江城研究』2 松江市
- (2) 西尾克己、稻田信、福井将介2014「江戸幕府収納の出雲国絵図に記された「古城」について」『松江歴史館研究紀要』第4号 松江歴史館
- (3) 島根県教育委員会2001『島根県中世城館跡分布調査報告書1 出雲編』

（なかい ひとし 滋賀県立大学人間文化学部教授）